

第11回北海道病院学会
平成23年7月9日

Aripiprazoleにおける 錐体外路症状の検討

五稜会病院
河村 論、中島里美、曾山桃子

Aripiprazole(エビリファイ)

D2受容体パーシャルアゴニスト作用を有する第二世代抗精神病薬。重大な副作用である錐体外路症状(extrapyrarnidal symptom:EPS)の発現が少なく、海外臨床試験においてはプラセボ群と差がないと報告されている。

米国では双極性障害の躁状態やうつ病に対する増強療法などの適応追加。近年、適応拡大のために適応外使用が多く認められる。

目的

適応外使用が多く認められるAPZの処方調査し、EPSに着目して副作用の違いを検討する。

～安全性(副作用)の問題～

臨床試験での安全性情報は適応対象疾患に対する厳しい条件下で得られたもののため、適応外使用時には参考程度にしかならないとされている。

病態の違いで副作用が異なる可能性

調査データ

●対象

【期間】2008年1月1日～2010年12月31日

【症例】APZ服用患者545名のうち単剤投与の205名(再処方を含めた213例)

【判定】EPSの判定は、抗パーキンソン薬が処方された場合。減量・中止時はカルテの記載により判断。

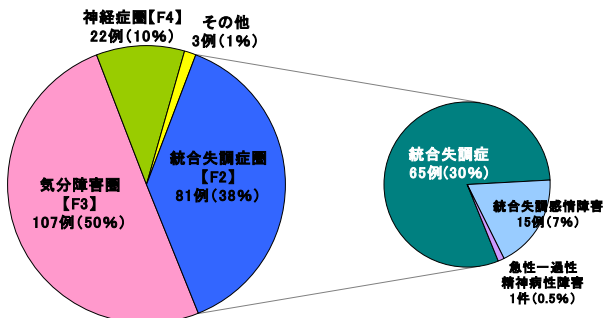
●基本情報

【男:女】67例:146例(1:2.18)

【年齢】男性:36.8±11.5歳 女性:34.7±14歳

対象疾患

※【】は国際疾病分類(ICD-10)による分類

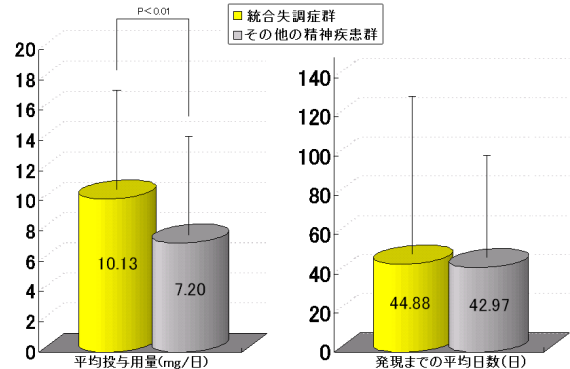


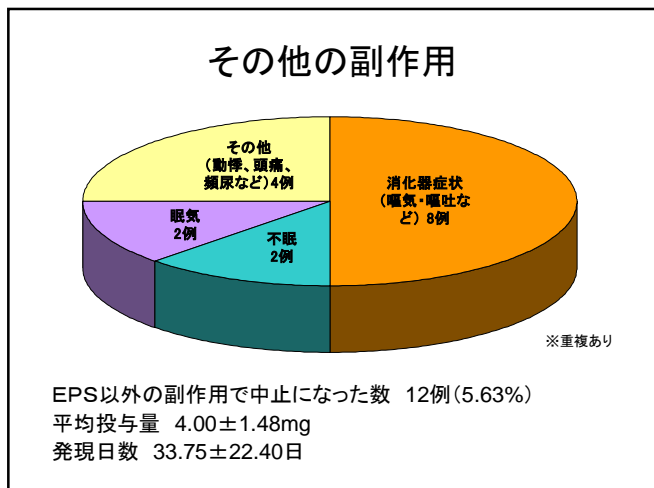
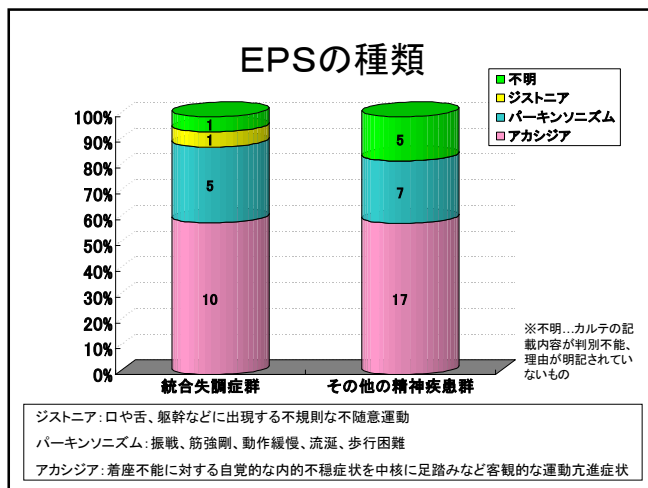
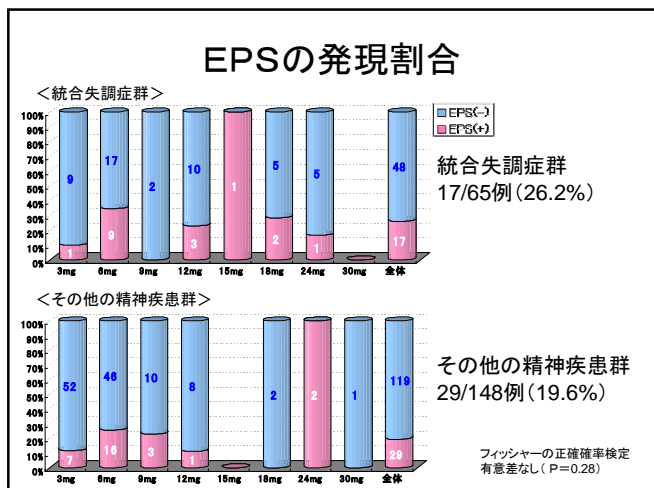
気分障害圏(F3): うつ病、双極性感情障害など

神経症圏(F4): 強迫性障害、パニック障害、不安障害など

EPS発現時の投与量と日数

mann-whitneyのU検定





まとめ

APZのEPSに関する症状・発現頻度は、適応外使用時でも同程度であった。EPSが用量依存的に発現していない点からも、APZ特有のD2受容体パーシャルアゴニスト作用の関与が考えられた。

全体的に低用量の症例が多かったため、今後は高用量のデータも収集し、さらなる検討が必要と考えられた。

<参考文献>
 三宅麗美, 宮本聖也, 向精神薬の適応外使用 (適応拡大) の現状と問題点. 臨床精神薬理, 12, 623-632 (2009)
 田原健彦, 堀川周一. Arpiprazoleにおける副作用の検討-50症例の経験から-. 臨床精神薬理, 11, 1701-1710 (2008)